

---

# 彼らのPUZZLE

yoshina

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼らのPUZZLE

### 【Nコード】

N6227G

### 【作者名】

yoshina

### 【あらすじ】

レットイットビー事件で負傷し入院した高木と、お見舞いに来た佐藤の話。高佐ほのほの系。64巻発売記念。（アニメ派の方はややネタバレになりますので、ご注意ください）

暇つぶしに、と千葉から貰ったパズルを高木は根気よく組み立てていた。

お見舞いに来て、何度目かのその場面を目にした佐藤は感心よりも呆れる風に言った。

「よく続けられるわよね。出来上がっても何の絵にもならないのに」

彼が取り組んでいるパズルは無地だった。

真っ白のピースだけがベッド上のスライド式机にちらほらと散っている。

「いや、案外これで面白いもんで」

「ふうん」

コートを脱いで、彼女はベッド側のパイプ椅子に座る。

それに合わせて、高木はほとんど埋まったパズルとピースを片付けようとしたが、彼女の「そのままでもいいわよ」という言葉で途中で止めた。

「それ千葉君があげたとき私もいたけど、まさかこんなちっちゃくて真っ白なピースがここまで埋まるなんてね。あなたの性に合ってるのかしら」

「そうかもしれません。なんかやりだしたら止まらなくて。……でも」

不意に肩を落として目線も下ろす彼に、佐藤は心配そうに促す。

「でも？」

「無くしちゃったんですよ。ピースの欠片を」

昨日の昼間、何となく外の空気が吸いたくなり窓を開けたところ、突風が吹いたという。

慌てて窓を閉めたが、パズルを再開したときにはピースが一つ無くなっていたらしい。

病室をよたよたと探し回ったが、見つからなかったので、外に飛んでいってしまったと、彼は結論付けていた。

「このピースなんですよねー。もうちょっとで終わるから余計に残念で」

人差し指で、失くしたそれがはまるべきだった場所をとんとんと突く。

佐藤も見ると成程、確かに残っている数枚とパズルを照らし合わせれば一枚足りない。

彼がこの一週間こつこつと組み立てていたのを知っているだけに、彼女もたかがパズルとは思えなかった。

眉間にしわを寄せて白い空間を見つめる。

ふと、彼女は自分の鞆に視線を移して、思いついたようにあさり始めた。

「佐藤さん？」

不思議そうに彼が問うのも気にせず、「こそごととトートバッグの中を弄る。

そしてすぐにお目当てのものがつかめたらしく、手を抜いた。

「あったあった」

それは未開封のストッキングだった。

よく動き回るせいで、よく伝線するストッキングの予備を彼女は持ち歩いていた。

徐にその封を開けて中身を取り出す。

だがストッキングではなく、それが包んでいた白い型紙を机に置いた。

次に胸ポケットからボールペンを取り出して、無くしたピースの空白をじつと観察するように睨む。

捜査中の様な鋭い目つきに、高木は何も言えず黙って見守るしかない。

佐藤は空白を凝視しながら、紙にペンで徐々に線を描いていく。それが終われば、線上を今度はハサミで切っていった。

ここまでしたら高木でも彼女が何をしているのかはわかる。

ああそうか、と彼はぼつりとこぼした。

慎重に切った佐藤は、小さな欠片を折らないように指でつまんで彼の前に差し出した。

「できた。これでいけるかしら」

彼も神妙に頷いてから、まるで真綿のように欠片を丁寧につまんだ。

恐る恐る、パズルにはめ込む。

「「あ」「

思わず二人の声が重なった。

彼女の作ったピースは見事にはまったからだ。

「ありがとうございます。……すごいすね、複写せずに見ただけ

ではまるなんて」

「うん、私もちょっと驚いてる」

二人して、くすりと笑い合い真っ白なパズルを見下ろした。

自然と、彼は残りのピースも迷うことなく正しい場所にはめていく。

既に埋める場所はわかっていたようだ。

最後の欠片もぱちりと埋め込み、それはただの白い型紙のようになつた。

「こつやつて見ると、白いだけなのに何となく感慨深いわね」

「そうでしょ？」

得意そつに高木が相槌を打った。

「これをずっとやり続けていると、真っ白だけど、目に見えない何かが書いてあるような気になっていったんですよね」

指でピースの割れ目をたどりながら言う。

彼女は興味深げにそんな彼の顔を覗き込んだ。

「あら、じゃあ完成したこれは何が書いてあるの？」

高木は困つたように笑う。

「目に見えないんですから、わからないですよ」

「なんだ、つまらないわねー」

彼女のジト目をいつもの苦笑で受け流すと、扉のノック音がした。どうぞ、と彼が言うのと看護師がドアを開けて「レントゲンの時間

です」と伝える。

「あれ、もうそんな時間か」

「それなら、私もそろそろお暇したほうがいいかしら」

「でも、すぐに済みますからちょっと待っててもらっていいですか？ さつき来てくれたばかりだし」

彼女が頷くと、ぎこちない動きでベッドから降り、床にあるスリッパに足を入れた。

もう介助が無くて一応は歩ける。

では後で、と声をかけ彼は看護師の跡に続いて部屋から出て行った。

彼が扉を閉める音が、病室にやけに響いていた。

急に一人になった佐藤は、ふうと息を吐く。

どんなに忙しくてもやっぱり彼を見ると、自分は元気が出るらしい。

案外単純な自身に悪い気はせず、彼女は残されたパズルをもう一度眺めた。

目に見えない何かが、という先ほどの言葉を思い出し、じっと見つめる。

彼はわからないと言っていたが、それは嘘なのではないかと佐藤は思っていた。

隠し事というものでもない。

ただ、大事そうに彼が心の中に秘めた何か。

この白い世界で彼は一体何を見たのだろう。

佐藤はそれが知りたかった。

そのとき、鞆からケータイの振動音がした。

ぱちりと待ち受けを開けると上司の名。

「むりでないならもどってきてほしい」と、たどたどしい平仮名

だけのメールを読み、彼女は条件反射で立ち上がる。

既に一日の勤務時間は済んでいたが、何か起こったということだ。高木に何も言わず行くのも気が引けたので、彼が戻ってくるまでは居ようかと迷う。

しかし次に思い立ったように、彼女は机に放ってあった自分のボールペンを再び手に取った。

握ったままの体勢で少しだけ考えた後、真っ白なキャンバスにペンを走らせた。

今度は、線ではない。文字だ。

自分に見えた世界が、少しでも彼と重なればいい。

意外と躊躇い無く書けたその文字に、佐藤は不思議な感情を抱きながらペンのキャップをしめる。

「じゃあまた来るね」

主の居ないベッドに向かってそう言うと、彼女はコートを取って部屋から出て行った。

『高木美和子』、と書かれたパズルだけを残して。



(後書き)

戻ってきた高木はすごい驚くと思います(笑)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6227g/>

---

彼らのPUZZLE

2010年10月9日00時50分発行